

## 第4章 加害者に着目したいじめ集団類型

迫田 真由子

### 1. 問題設定

夏木(1995)は「いじめとは権力ゲームの一人勝ちを意味する」という。つまり、加害者は被害者より強い権力を持ち、被害者に対してその権力を自由に振るっている。そして、被害者はその権力に従わざるを得ない状態に置かれている。これが「いじめ」だということである。被害者と加害者の力関係についてはこれまでになされた様々ないじめの定義にも現れており、その多くにおいても、加害者よりも被害者の方が弱い立場におり、加害者は強い立場にいるものと捉えている。本調査においてはいじめを定義づけせず、被面接者の主観に任せ、被面接者がいじめだと感じているもの全てを分析の対象とした。そして、本調査からも加害者・被害者間に力関係が存在している事が窺えた。この加害者と周辺に位置する生徒との力関係がどのように生み出され展開されていくのかという過程について、本章では考察してみようと考えている。

いじめにおける生徒集団については、80年代前半に見出されたいじめの四層構造の概念が一般的であるが、この分類について橋本(1999)は、問題点として「特定のいじめ行動に関して一時点で固定された集団構造を分析している」点を挙げ、「そのためいじめを取り巻く集団形態の多様性と、時間の経過に着目した分析が不足する傾向にある」と指摘している。いじめの四層構造や橋本(1999)の研究については、7章で詳しく述べられているので、内容についてはここでは触れないが、橋本(1999)が「実際に状況がどこまでエスカレートしていくかは、あくまで加害者に委ねられている」と指摘しているように、加害者によっていじめの展開は異なると考えられる。そこで本章では加害者と周囲の動きに焦点をあて、いじめ集団を検討した。

### 2. いじめ始動者のメカニズム

まず初めに、いじめを始動したのは誰かという点に着目し、いじめ開始時点における中心人物を検討した。大きく分けて、教師がいじめ発生に影響を及ぼしている場合と、教師の影響はほとんど考えられない場合の二つに分けられる。(下記の事例の「 」内は被面接者の言

葉をそのまま記してある。以下同様。事例番号は他章の事例番号と同一人物を示す)。

#### (1) 教師始動型いじめ

##### 事例48 (小1：女子)

「一番最初に、先生が、私わがままだっていうレッテルを貼ったんです、私に。小学校1年生の時。で、周りの子がそういうのに便乗しちゃって」  
「(先生が)言葉の端々で『お前、わがままだなあ』みたいな感じで。『お前、生活面最悪だな』って平気だったので」

被害者Tの通っていた小学校は一学年が約52人と少なかったため、しだいに生徒からもいじめられるようになり、いじめは学年全体へ広まった。

##### 事例6 (小3：女子)

「きっかけ……。簡単にいうと、3年の半ばぐらいの事なんですけど、私、転校生で、言葉が通じない。(中略)私は普通の言葉しゃべってて、なんかそれが気に入らないって(中略)言葉で言ってきたのは先生。先生が授業中に。先生も方言使っちゃっているから」  
「4年生の時に担任にやられたってというのは、(中略)給食とか絶対食べきれなかったんだけど。その先生が、わざわざ残して食べさせるっていう」

被害者に対する生徒のいじめが激しくなったのは4年生の時から。これは親の介入により解決した。

これらの事例では、被害者は「まず、教師にいじめられた」と思っていることがわかる。教師の発言や態度が被害者にレッテルをはり、それが生徒間のいじめに発展したと言える。これらの事例のように、「教師にいじめられた」と被害者が感じているものを、「教師始動型いじめ」とした。これらの例は、件数としては少なく、また、「教師始動型いじめ」は後に、生徒間のいじめに発展していく。

#### (2) 生徒始動型いじめ

「教師始動型いじめ」に対し、いじめ発生時点におい

ては教師の影響が見えないもの、つまり、生徒のみの間で起こったいじめを「生徒始動型いじめ」とした。「生徒始動型いじめ」はその中心人物により、さらに2つのタイプに分けられる。「リーダータイプ」始動のいじめと「問題児タイプ」始動のいじめである。

#### a リーダータイプ

「リーダータイプ」とは次の事例に見られるように、勉強やスポーツなどに優れ、教師からは信頼される事が多く、生徒も、その人物がクラスの中心である事を、ある程度認めざるを得ないタイプを指す。周囲に位置する生徒から見て、「怖い」という面も存在するが、良い意味でもクラスを引っ張っていく可能性を持っているタイプである。

#### 事例21 (小4～小6：女子)

一人の女の子が男の子から、叩かれたり、どつかれたりした。女の子からはかげ口や無視をされた。女子は3つのグループに分かれていて、いじめをしていたのは1つのグループ。男の子の中にはグループ分けはなく、中心の人達がいて、その周りに集まっている感じ。中心の男の子達がいじめれば、みんな同調していじめるという感じだった。中心の男の子達といじめるほうの女の子達は仲良かった。「男の子の中では走るの早い人が一番強く、女の子の中でも、いじめる人達はスポーツが出来る感じ」だった。

#### 事例11 (小4：女子)

一人ボスっぽい子がいて、その子が「今度はこの子ね」って無視する子を決め、次々にターゲットが変わる、ローテンション型のいじめ。みんなは嫌々ながらもそのボスに従っていた。ボスの子は「ただのわがまま言うのではなく、面白い子だった。人気者だった。惹き付ける部分もあった」。だから従った。

#### 事例19 (小1～小2：女子)

加害者の子に色々隠されたりした。周りの子は加害者が隠すのを見ても「言えないな」という感じだった。加害者は「かなり発言力もあったし、周りの雰囲気も自分のモードにさせるような、そういう雰囲気を持っていた。運動神経もあって、頭の回転も早くて、勉強が出来ないわけでもないというタイプ。だけど、自己中っていうか、自分が一番にならないと、周りにあたっちゃったり」する子だった。

#### b 問題児タイプ

「問題児タイプ」とは、周囲が、加害者側の中心になっている生徒に対し、否定的なイメージを強く持つタイプを指す。

#### 事例20 (小1～小2：女子)

入学して段々、いじめられるようになった。口で言われることから始まり、段々とひどくなって、露骨に嫌悪感を示したり、叩かれたりした。いじめていた中心の子は一人で、時々、もう一人、別の男の子も中心になっていじめた。

「先生から見ても2人は問題児だったんじゃないかな。よく、親も(懇談会等で)謝ったりしてたし」

#### 事例56 (小6：女子)

転校生だった被害者にあるグループから「グループに入れてやってもいい」という手紙がきて、それには「人に見せるな」と書いてあったが、見せてしまったことから、呼び出されたり、口で何か言われたりした。そのグループは「一番不良っぽいグループ。中学校に入ったら不良とつながっていくようなグループ」だった。

#### 事例50 (小5：女子)

転校した学校で仲良くなった2人の子達に授業中に何かされ、それを周りの子が教えてくれた。「2人のうち、一人は強い子でもう一人は従っている子。ボス的な存在の子がいつも転校生と仲良くして、ある程度すると意地悪しだすみたいなお子。強い子がちょっと意地悪」だった。

#### 事例32 (小6：女子)

被害者の女の子1人対クラス全体という感じになったいじめで、女の子はそれほど激しくなかったが、男の子がすごかった。いじめの中心は「(男の子の)反抗グループ。担任の先生にすごく反発」している子達だった。

#### 事例64 (小学校高学年：女子)

グループの中で1人ずつ順番にいじめられた。中心になっていじめを回していたのは、「リーダー格のそういう根性ひねくれているような感じの女の子」。

#### 事例19 (小5～小6：女子)

「上履きを隠されたり、給食の牛乳のなかに何か入れられたり、叩いたりとか、物をぶつけたりとか」された。中心になっていたのは男の子。「陰湿的に怖いっていうか、性格とかで怖いっていう」感じの子だった。

### 3. 周囲に位置する生徒集団の行動

「リーダータイプ」、「問題児タイプ」、どちらのタイプであれ、このような人物が中心となって始められたいじめは、多くの場合、加害者と被害者のみという「個人対個人」の構造で終わる事は少なく、周囲にいる生徒を巻き込み広範囲ないじめへと拡大していく。クラス全体対被害者といった「集団対個人」のいじめにまで大きくなるか、または、クラス全体までは広がらず、「特定のグループ対個人」という構造になるかという点に違いはあるが、周囲にまでいじめが波及していくことは共通している。周囲への波及の仕方としては、加害者への同調行動がほとんどである。周囲に位置する生徒が加害者側に同調する心理としては、これまでも研究がなされており、「仲間集団から脱落することは集団から孤立することであり、次にいじめられる可能性があるために、積極的にせよ、消極的にせよ、いじめに加担せざるをえない」などといわれてきた。本章において、加害者の中心に位置する人物が周囲を引き込む要素として、「信頼感」と「恐怖感」の2つが考えられた。被面接者の回答の中から、加害者に合わせて行動した理由を見てみると、「ただのわがままっ子っっていうだけじゃなくって面白い子だったし、人気者っていうか、そういう惹き付ける部分もあってその子を好きな部分とそこまでいったらっていうのとあって、だから、そういう惹き付けられる部分もあったから嫌々ながらも従った」という事例11（小4：女子）や、「その子がいるとクラス対抗とか学年対抗でも勝つから、そういう意味で『ついていこう』みたいなどころがあった。でも、怖かった」という事例19（小1～小2：女子）が典型例として挙げられよう。加害者に対し恐怖心を持ってはいるが、恐怖心と同時に加害者に対する信頼感を持っており、加害者がある部分では「良きリーダー」であると認めているために、加害者の行動に合わせたと考えられる。このタイプは、「リーダータイプ」の中心人物によって始められたいじめにあてはまる。それに対し、「陰湿的に怖いっていうか、性格とかで怖いっていうか、かばうと逆に自分に来るっていうか、実際にあったんですね、そういうことが。『ここは傍観していないと自分もやられる』っていうのが浸透していった」という事例19（小5～小6：女子）や「（被害者の）相談にのってたけど、（加害者側から）『何で仲良くしてんの』って言われたりして、『皆がいるところではあまり仲良くしないようにしようって思って』」という事例9（中1：女子）からは、周囲の生徒が、加害者に対する「怖い」という思い、「自分にまわってきたらどうしよう」という恐れから加害者側に同調したことが

わかる。事例11や事例19（小1～小2）にみられる、加害者への肯定的な感情は表れず、否定的な感情のみがみられる。これは多くの場合、「問題児タイプ」の中心人物によって始められたいじめにあてはまる。

### 4. いじめ展開過程における分類

いじめの経過に伴い、加害者の立場がどう変化したかを見ると、「①クラス替えや卒業・進学などによる状況の変化によりいじめがなくなるまで、いじめの中心の位置していたもの」と「②初めはいじめの中心に位置していたが最終的にはいじめの中心でなくなったもの」の2つに分けられる。①を「存続型」、②を「転落型」とする。「存続型」には加害者が自分の行動を変化させ、自らいじめをやめたものを含む。また、親や教師など、大人の介入によりいじめが解決したものについては、親や教師の介入で周囲の生徒がそれまで加害者の中心だった人物に同調しなくなった場合が多いため、「転落型」に含めた。本章では加害者と周囲の生徒集団の行動に着目し、加害者が周囲の生徒を引き込む時に大きく関わる要因である、その人のクラスでの位置、「リーダータイプ（信頼感あり）－問題児タイプ（恐怖感のみ）」と、最終的な加害者の立場を示す「存続型－転落型」の2軸をクロスさせいじめを4つに分類した（図1）。

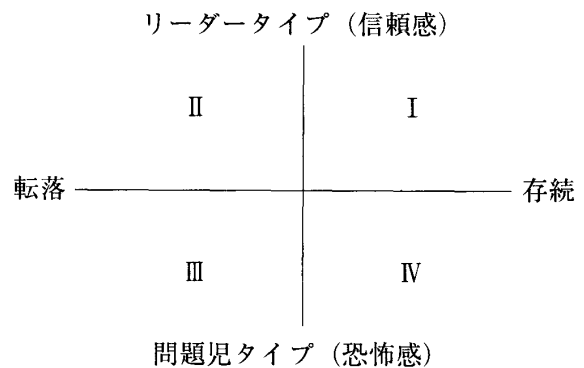


図1：いじめ展開の経過に基づく分類

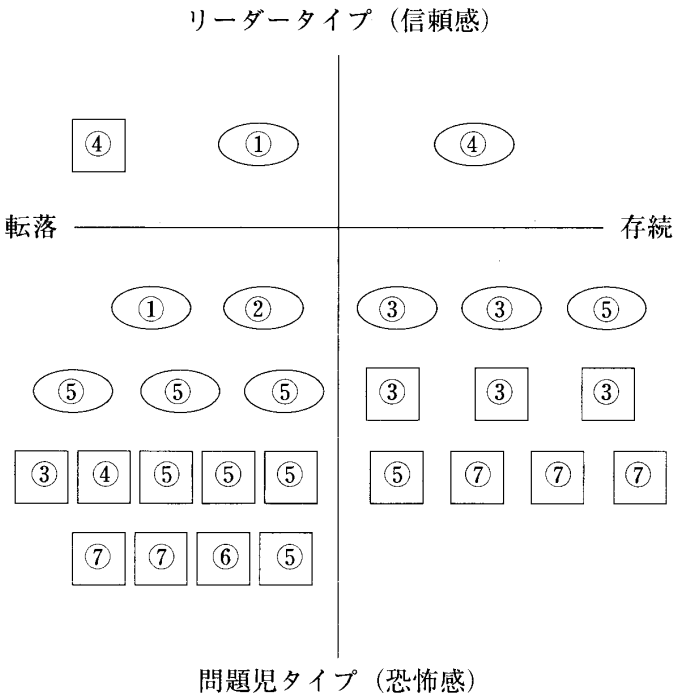
- I：リーダータイプ存続型  
……リーダータイプであり、周囲の信頼があるため最後まで加害者の中心にいるもの
- II：リーダータイプ転落型  
……リーダータイプであり、初めは周囲の信頼もあり、いじめの中心に経っていたが、最終的には中心人物でなくなったもの
- III：問題児タイプ転落型  
……問題児タイプであり、周囲は初め恐怖心から同

調していたが、最終的にはいじめの中心人物ではなくなっていくもの

IV：問題児タイプ存続型

……問題児タイプであり、周囲の恐怖感から、最後まで中心に居続けるもの

図1に本調査の結果をプロットしたものが図2である。



- ① 小学校低学年
- ② 小学校低学年から中学年
- ③ 小学校中学年
- ④ 小学校中学年から高学年
- ⑤ 小学校高学年
- ⑥ 小学校高学年から中学生
- ⑦ 中学生

○ → 男女ともに関わるいじめ  
 □ → 同性のみのいじめ

図2：いじめ展開の経過に基づく分類結果

各分類で特徴的な事例を次にいくつか提示する。どの様にいじめが始まり、それがどの様に生徒の間に広がっていったか。教師の関わりはどうであったか、最終的にどうなったかについて中心に検討した。

I：リーダータイプ存続型

事例21 (小4～小6：女子)

被害者は「性格的におとなしくて、ちょっと動作とか言動がゆっくりしている感じ。その子は、動作がのろいっていうので目立った」。いじめ始めたのは「男子の中心と女の子の一部」。内容としては「男の子は叩いたり、どついたり、乱暴な感じで、女の子は陰口とか無視したりとか、仲間外れっていう陰湿な感じ」だった。当時のクラスは女の子は3つのグループに分かれていたが、男子はグループ分けがなく、中心の人達の周りに集まっている感じだった。このいじめは男子全員と女子の一つのグループに広まった。「その(中心の)男の子と女の子達は仲が良かった」。このクラスの生徒間の力関係では「スポーツってすごく大きな要因だった」。「(男子の中で)走るのが速い人が一番強く、女の子の中でもいじめめる人達は気が強くて、スポーツが出来る感じ」だった。4年と5年の間で、クラス変えがあった。しかし、被害者は継続していじめられ、卒業するまで変わらなかった。5、6年の時も加害者の中心は同じ。5、6年の時は教師の態度も気づかぬうちにいじめを促進していたことが窺える。4年生から始まったいじめの中心人物はスポーツが出来る子であったのに、5、6年の担任は「毎朝マラソンを義務づけて、スポーツで汗を流して、イヤなことは全部吹き飛ばそう」という先生であった。スポーツを重視したことにより、スポーツが得意な加害者たちをさらに優位な位置につけることになっていたと考えられる。さらに、5、6年生になると男子だけではなく、女子にも迎合傾向が現れ、4年生の時から加害者だった女の子の周りに迎合する子が現れ始め、いじめが広がっていった。しかし、女の子達の場合は、スポーツが出来る事に加え、恐怖感も大きくなっていったようである。

「リーダータイプ存続型」のいじめは本調査では上記の事例しか見られなかったため、詳細な分析は困難であるが、この事例に関しては、「スポーツ重視」の教師の態度がリーダー的存在の子をリーダーとして確実なものに位置づけてしまった事が考えられる。このように、教師の態度によりいじめ展開が左右される事が、次に挙げる事例19からもわかる。

II：リーダータイプ転落型

事例19 (小1～小2：女子)

このいじめは小学校1年生で起こり2年生の途中まで続く。物を隠されたり、蹴られたりした。1年生の頃は「リーダータイプ存続型」と同様の展開をたどるが、2

年生になり、担任が替わりその担任の影響でいじめが解決へ向かい、中心人物だったAと周囲の生徒に変化が見られた。被害者は「あまり自分を表現するような子ではなく、おとなしめのタイプ」。加害者の中心であったAは「クラス全体のリーダー的存在」の子で、「運動神経もあって、頭の回転も早くて、勉強が出来ないわけでもないというタイプ。だけど、自己中ってというか、自分が一番にならないと、周りにあたっちゃったりとか。支配したいって感じ。ちょっと、みんなが怖がっている感じ。でも、その子がいるとクラス対抗とか学年対抗でも勝つから、そういう意味で『ついていこう』みたいなところが（周囲に）あった」。Aが中心になって被害者の持ち物を隠すが、それを見ている周りは何も言えず、「すごい仲の良かった女の子の友達もその子がなんか言えば、加害者にまわっちゃう」。先生に相談しても、「あなたの被害妄想、とか、あなたが弱いからいけないのよ」といわれ、さらにAに対し、「あなたはリーダータイプの子だし、優しいのね」と肯定的な評価をする。クラスの男子は「Aをリーダーとしてそこから枝分かれ的に子分ってというか、絶対服従みたいな感じ」。Aがいて、子分がいて、さらにその下に子分がいるといったはっきりした関係が出来ていた。女子は「それほど、絶対服従の枝分かれにピシピシしてはまってるわけじゃないけど、リーダーの子に引っ張られる」という構造が出来あがっていた。しかし、2年生になり担任が替わってAの力をコントロールし、良いところでリーダーシップをとるところは延ばし、「いじめたりとか人のことを傷つけちゃったりとか、傷つける様な事を言う時とかは、絶対駄目って感じ」で接した事により、ワンマン的リーダーとしてのAは失脚した。それに伴い、Aの下にいた子分達はAの顔色をうかがわなくなり、Aが失脚したことで、周囲もいじめを自然としなくなった。

この事例は加害者Aがクラス全体のリーダーであったために、クラス全員が従う形になってしまった。また、1年次の担任のAに対する「クラスリーダーとしての評価」も、周囲を惹き付ける大きな要素になっている。

これに対し、次の事例は、特定グループ内でのいじめであり、加害者と被害者が逆転することで加害者がリーダーとしての位置を失った例である。

#### 事例11（小4：女子）

この事例は特定のグループの中でいじめられるターゲットが次々と変わっていく、ローテーション型のおいじめである。加害者は「ただのわがままっ子ってうだけじ

ゃなくて面白い子だったし、人気者ってというか、そういう惹き付ける部分もあった」ので周囲は「嫌々ながらも従った」。しかし、リーダーの命令により無視が進行していくにつれ、被害者の間に「もうこりごりだ、冗談じゃない」という気持ちが起こり、皆でリーダーを無視するようになる。無視されたリーダーはすぐに、地域のドッチボールチームの監督に言っしまい、その監督の対処で一応解決する。その後はそのリーダーも前のように命令することがなくなったので、いじめは終わった。

このいじめは、地域のグループ内で起こったものであり、クラス内でのグループで起こったものではなかったので、いじめの範囲が広がらなかったのだろう。

### Ⅲ：問題児タイプ転落型

#### 事例27（小5～小6：女子）

加害者はクラス内の強い子。「ちょっと気に入らない事があると、『あの子いやだから無視しよう』」と言い出し、ターゲットになると、ひとりぼっちで置いて行かれたり、シカトなどされた。「その子が先頭になって、みんなを引き連れて」行われた。男子は「そういうの、わかってたばくって、別にそれを一緒にやるわけではなかったが、女子はクラスの女子全部」が行った。ターゲットが移行するので誰もが被害者と加害者の立場を経験。「自分としてはやっぱり、自分もされてるから、嫌なのはわかってるんだけど、でもまたそこで、なんか、かばっちゃったりすると、また自分になるかって思って」、その強い子に従っていた。その加害者の子は「先生のお気に入りだったし、怖かったから、誰も先生に言いつけなかった」。六年生の終わり頃には「みんなもだんだんやだって言うのも、みんなも思ってるってわかってきたから、だんだん、で、最後の方は結構みんなに従わないようになってきて、『あいつ無視しよう』とかいってもみんながかばうみたいな感じで、逆に、その強かった女の子が、周りから、何でああいうことするんだろう、みたいな感じになってきて、みんなで文句言いに行きました」。

#### 事例65（小学校高学年～中2：女子）

「中学校の時、人をはぶっちゃった。なんか、大将の子がいるじゃないですか、クラスの中だとか、グループの中で、みんな嫌いになってその子をはぶった」。大将だった子は小学校の時から、「人を使うような、何持ってきてとか、誰かしら絶対身近においておいて、誰かを絶対おいておいて誰かをはぶってみたい、なんかそう

いう感じの子」。「一人は絶対残しとく、キープしといてみたい。こっちを自分の横に置いておいてこっちをはぶる。で、今度はこっちを味方に付けてこっちをばぶる、の繰り返し」をしていた。このようなことが繰り返されるうちに、仲間外れにされていた人達がまとまり、中学2年生の時にその大将の子を仲間はずれにするようになった。

#### 事例64（小学校高学年：女子）

ターゲットは次々と変わった。「グループの中で5・6人にて、一人ずつ一人ずつ、いじめられていく順番に。5・6人のグループの中で一人ずつ、この子こういうとこヤダよね、みたいな、裏でその子以外でこそこそ言って、ちょっと避けちゃうみたいな。でも、何日か経つとそれがいつの間にか他の子になって、こう、順番にめぐってく」。加害者は「根性ひねくれているような感じの子」。はじめは「みんな、怖いから合わせちゃう」。そのような状態が続いた後、「その子ヤダよね、ってみんなで結集して、最後には」。

#### 事例2（小1～小3：男子）

「強気な女の子みたいなのがいて、結構、乱暴って言ったら変なんですけど手を出して来るっていう子がいたんです。弱そうって言うか、構いやすそうな子に、男女問わず。だんだん、みんなで逆に、その子をはぶいたり」。

これらの事例に見られるように、「問題児タイプ転落型」の代表的なパターンは加害者と被害者が逆転するケースである。「問題児タイプ転落型」のいじめでは、加害者がいろんな人を、誰彼かまわずいじめていることが多い。そのために被害を受けたものが集まり、加害者と被害者の逆転が起きる。いじめの内容も「無視」「仲間外れ」が目立つ。周囲の生徒は中心の生徒に従っているときから、中心の子に対して否定的な感情を持っているので、逆転しやすいといえる。

### Ⅳ：問題児タイプ存続型

#### 事例46（小6：男子）

加害者は「ガキ大将みたいな感じ」。加害者との関係は、「ジャイアンとの関係みたいな感じで、下にくっついてみたいな感じ。途中からそうだった」。いじめられる内容は殴られる、命令されるなどであった。「仲良くけこう遊んだりもしていたので、はじめは個人的で、自分がなんか冗談とか言うのと殴られるという感じだ

ったんで、別に嫌とかはなかったんですけど、途中からそれに違う友達が混ざってくるようになって。男子のほとんどからやられて」。「小学校を卒業して、ガキ大将みたいな子が違う中学に転校して行って、なくなった」。

#### 事例59（小3～小4：女子）

「仲良かったグループが、その一番仲の良かった子が一番上に立っている感じで、今週は誰々ちゃんが無視とか、今週は誰々ちゃんが無視」などと、ターゲットが変わっていった。加害者の子は「すごいお天気やさんで、調子がいい」人だった。当時、その一番上にいるこの事を「とにかく強い、と思っていた」。5年生になったら、その中心にいた子がおとなしくなり、いじめはなくなった。中学に行ってから他の友達と「1対いっぱいなんだから逆らえば良かったと思わない？」という話になったが、「すごい怖かったよね」という話でまとまった。

これらの事例に見られるように、「問題児タイプ存続型」のいじめは、加害者がいじめを辞めるように変化したり、転校などの状況の変化により終結していくと考えられる。このタイプが一番、「チクッタ」と言われる、教師などに知らせた事による加害者の仕返しを恐れるパターンと言えらる。

### 5. まとめ

いじめをその展開過程により分類し、それぞれの特徴を見てきたが、全体として、リーダータイプよりも、問題児タイプの方がいじめを起しやすいく、また、いじめは小学校中学年（3・4年生）以降に起こり始めることが多いと言える。

小学校3・4年生では「問題児タイプ存続型」が多いが、小学校5・6年生以降になると「問題児タイプ転落型」の件数が増加する。この傾向は特に、女子に見られる。女子は小学校3・4年生頃からグループ分けがおこり、「誰々ちゃんを無視ね」と言ったように、順番に無視していくいじめが増加する。このタイプは次に自分にいじめがまわってくる可能性が高いため、周囲に合わせることが多い。小学校3・4年生では「次に自分がいじめられるかも」という恐怖感が強く周囲に合わせがちで、いじめが自然に終わるまでそのままの状態になる可能性が高いが、小学校高学年以上になると、加害者に対する否定的感情が大きくなり、被害者が団結して加害者をいじめ返す逆転の構造になる事が多いといえる。

また、性別による展開の違いを見てみると、男子と女子、両方が関わるいじめでは被害者が固定され、「存続

型」になりやすく、逆に、同性内でのいじめは、女子に顕著であるように、被害者が変化する事が多いため、「転落型」になりやすいと言える。

教師の介入を見てみると、教師の介入が多く見られたのは「問題児タイプ転落型」であり、中でも、被害者が固定され、男女共にいじめが広がっていくケースに教師の対応が大きく影響しているようである。これは、教師の対応により、いじめの中心人物に対する周囲の対応が変化するためといえる。従って、教師の対応によっては「問題児タイプ存続型」になる可能性も高いといえるだろう。「問題児タイプ転落型」の中でも小学校高学年以上で目立つ、女子同士のターゲットが変化するいじめには教師の存在はほとんど見られなかった。また、2の(1)で指摘した「教師始動型いじめ」はクラス全体に広がる可能性が大きく、被害者が固定されていくため、解決が困難で、多くの場合、「存続型」になると考えられる。

以上、見てきたことから、小学校3・4年生頃からいじめが発生し、被害者だけでなく、周囲にいる多くの生徒が加害者に対する恐怖感を抱くことが分かった。今後は生徒集団における「権力」という点にも、もっと焦点をあて、生徒集団の構造を考えていく必要があるだろう。

#### <引用・参考文献>

- 尾木 直樹 1995,『いじめ その発見と新しい克服法』学陽書房
- 菅野 盾樹 1997,『増補版 いじめ 学級の人間学』新曜社
- 滝 充 1996,『いじめを育てる学級特性』明治図書
- 多々良省三 1996,『いじめの定義』日本販売株

- 徳重 篤史 1985,「いじめと現代社会」『ジュリスト』5月号有斐閣,
- 夏木 智 1995,「いじめとは何か」現代問題教育研究会 『いじめ救済宣言』時事通信社
- 能重 真作 1987,『子どもといじめ』大月書店
- 能重 真作 1981,「集団いじめを許す生徒管理にひそむ問題」月刊生徒指導編集部編『集団いじめ』学事出版,
- 野崎 幸雄 1985,「いじめと現代社会」『ジュリスト』5月号有斐閣,
- 橋本 摂子 1999,「いじめ集団の類型化とその変容過程—傍観者に着目して—」日本教育社会学会編 『教育社会学研究第64集』,
- 森田洋司・清永賢二 1986, 『いじめ 教室の病』金子書房
- 森田洋司・清永賢二 1994, 『新訂版 いじめ 教室の病』金子書房
- 森田洋司他 1999,『日本のいじめ』金子書房
- 由紀 草一 1995, 「いじめ現象の分析」「いじめに直面するために」現代問題教育研究会 『いじめ救済宣言』時事通信社

#### <付記>

本章は、1999年度日本女子大学大学院人間社会研究科に提出した修士論文の第2章を加筆・修正したものである。